

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

	久保 陽子 【比較社会文化学専攻 平成20年度生】	要 旨
学位申請者		<p>本論文は、一九六〇年代から八〇年代初頭にかけて、演劇、短歌、シナリオ、エッセイ、映画など多才な活動をした寺山修司について、寺山が一貫して制度的なものを解体する方向で芸術活動を行っていたことを、活動の中核を担った演劇に焦点を当てて分析し明らかにしたものである。本論文は3部構成からなる。第1部では初期の「青森県のせむし男」「大山デブコの犯罪」「毛皮のマリー」を分析し、「見世物の復権」を掲げた寺山が「等身大」として表される既成の身体像や性規範を揺さぶりながら、制度化された身体を解体していく様相を分析した。バフチンのカーニバル理論の援用や「毛皮のマリー」に関してのアーサー・L・コピット作品との比較考察などを通して、性規範や家族規範の倒錯までを視野に鋭い考察がなされている。第2部では中期の活動において、同時代の海外の前衛的な演劇動向が寺山に与えた影響を考察しつつ、演劇という制度そのものの脱構築を試みた市街劇の実践を論じ、さらには商業演劇の枠組みで上演された「青ひげ公の城」における「観客との相互創造」が分析されている。同時代の海外の前衛的な演劇動向が寺山に与えた影響や市街劇を論じているところは従来研究されてこなかった領域であり大きな意義がある。第3部はいずれも晩年の代表作品である「奴婢訓」「レミング」と演劇的な映画「田園に死す」を通して、近代的自我としての「私」のあり方を揺さぶり、解体させていくさまを、記憶の修正や主人の不在、部屋を仕切る壁の消滅と衆人による監視など、主題の深層的な意味づけを分析しつつ追究した。12月27日の第一回審査委員会では、論の枠組みの妥当性を確認し、作品分析の確かさや、援用される各種理論の豊富さが高く評価され、論としての新しさや価値も評価された。一方、多面的な活動をした寺山の中で、演劇に特化した理由が明確で無い、各作品のスタッフ等の詳細を明示すべきだ、変革の時代であった同時代のポストモダン理論やインターテクチュアリティ理論との関連、日本のアングラ演劇運動の中での位置づけなどをもっと明確にすべきだとの指摘があり、再加筆が求められた。2月20日の第二回の審査員会では、久保氏が課題に精力的に取り組み、大幅な加筆によって課題に十分応えたと判断された。公開発表会では論の目的や主旨、各章の内容や分析の要点などを的確に述べた。質疑では質問に対しても適宜適切に答えた。以上、本論文は、初演時の劇評などを博搜して実証的でありながら、援用する文学理論などの方法論も的確で、内容は重厚かつ先駆的であり、博士（人文科学）、Ph.D. in Japanese Literature の学位にふさわしいものと判断した。</p>
論文題目	寺山修司の演劇媒体を通じた制度解体	
審査委員	(主査) 教授 大塚 常樹	
	教授 戸谷 陽子	
	准教授 谷口 幸代	
	教授 浅田 徹	
インターネット 公表	教授 守安 敏久	
	※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について	

